



瀬田の丘

創刊 1973 年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

復活節第 4 主日 B 年 (2024 年 4 月 21 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：使徒言行録 4 章 8—12 節

第二朗読：ヨハネの手紙一 3 章 1—2 節

福音朗読：ヨハネによる福音書 10 章 11—18 節

イエスさまがわたしを知っている

復活の主日から先週の復活節第 3 主日までは、復活されたイエスさまが、お弟子さんたちに現れる話が語られました。今週からは、復活されたイエスさまがどなたであったか、ということがイエスさまの口を通じて明らかになります。今日は、イエスさまが、「わたしは良い羊飼いである」(ヨハ 10 章 11 節) と、ご自分から断言されます。

今日の福音朗読にある、

「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」(16 節) に注目してみましょう。

この箇所^{かしよ}の直前に、「父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである」(15 節) とあります。そして、この箇所^{かしよ}の直後に、「それゆえ、父はわたしを愛してくださる」とあります。ですから、16 節の「こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ」の箇所は、前後に「父」という言葉に囲まれています。

16 節の冒頭^{ぼうとう}、「囲いに入っていないほかの羊」とは、ユダヤ人以外の異邦人^{いほうじん}を指すのでしょうか。異邦人もまた、羊飼いであるイエスさまに導かれて「声を聞き分け」、「一つの群れに」なります。どちらもギリシア語は未来形となっています。

そうしますと、18 節にあるようにイエスさまが「命を捨てて」、「再び [命を] 受ける」という復

活^{かつ}の出来事^{ひようげん}の後に、異邦人が群れに迎えられるようになるのです。イエスさまの復活は、イエスさまご自身のためではなく、新しく群れに迎えられる異邦人のためだったのです。

このように福音を味わってみますと、13節にある「心にかける」(ギリシア語:メレイ)は印象的な表現^{ひようげん}となります。羊を「心にかける」^{むか}牧者^{ぼくしや}であるイエスさまは、父からの掟^{おきて}に従^{したが}って、羊のために命を捨てる^すのです。

それは、新しい群れである異邦人をも含^{ふく}みます。まさに、イエスさまは、わたしたちのためにいのちをささげてくださいましたのです。イエスさまの死と復活に無関係な人などいないのです。

洗礼によってイエスさまと同じように神の子とさせていただいたわたしたちもまた、自分自身の「命を捨てる」^すようにと招^{まね}かれているのではないのでしょうか。

もう一つ注目したいのは、前後しますが14節です。

「わたしは良い羊飼^{とうじやう}いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」の箇所^{まね}に2度登場する「知る」です。

『ヨハネによる福音書』では、「知る」とか「分かる」という表現にはとても大切な意味があります。それは、単^{たん}に知識^{ちしき}として知っているというものではありません。「関わりがある」という意味です。15節では、「父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである」ともあります。ここを、意味^{やく}をくんで訳してみると、「父なる神がわたしのことをよく知っていて、わたしとの関わりあいがあるように、同じく、わたしも父なる神のことをよく知っていて、関わりあいがある」となるでしょう。「わたしは自分の羊を知っている」(14節参照)は、イエスさまの方から、わたしたち一人ひとりのことを知っておられ、イエスさまの方から関わってくださることを、イエスさまご自身が宣言している一言なのです。

イエスさまがわたしを知っている。ありがたい話です。



「善き羊飼い」バルトロメ・エステバン・ムリーリョ